

きょうと福祉倶楽部だより

新春 1号



あけましておめでとうございます。

今年のおたより第一号！バタバタと新年が始まりましたが無事発行できました。今回は、以前から親交のある成年後見人として活動されている司法書士の古川直子さんに寄稿していただきました。

成年後見業務に関わって思うこと

私が司法書士として成年後見業務に携わるようになって早いもので、今年で7年目になります。この業務をしていなければ決して出会うはずのなかったであろう方達と出会い、人生の最終コーナーを伴走し、幾度もお見送りをさせていただきました。受任している方々には認知症をお持ちの方が多く、業務の経験を重ねるにつれ、最近は精神障害のある若い方の後見も受任させていただくようになりました。

職業後見人とはいえ、福祉の分野に関しては、ずぶの素人です。認知症等の障害を抱える方とどのように接するべきか学んだこともなければ(全くないわけではないですが研修は講義形式ばかりです。他の後見人がどうしているのかも未だに寡聞にして殆ど知りません。

ですが、慣れない現場で溺れるように実務についていた新人時代の私が自然に編み出した方法は、今振り返ってみてもそんなに悪いものではなかったように思います。それは自分を偽らず一人の人間として対等な立場で向きあわせていただくというものです。

認知症の方の洞察力が非常に鋭いことは、年老いた姑の介護の経験を通じて痛いほどよくわかっていました。

支援者側にある以上、どんなに注意を払っていても、自分の方の立場が上だという錯覚が入り込む余地を防ぎ切ることは出来ません。

ほんのわずかでも「こいつは自分のことを馬鹿にしているな」と気取られてしまえば、心を開いてもらうチャンスは絶対に二度と訪れないでしょう。何よりそんな冷めた関係のままご本人と長く付き合っていくなんて想像するだけで耐えられないません。

それにただでさえ自らの衰えに自信を喪失しているご本人の自尊心を、更に損ねるようなことはしたくありません。

また、丁重に接するのもそっけなく振る舞うのも違うように思います。そのようにご本人と距離を保っていれば、確かに自分が傷つくことはないでしょう。対人支援職として自分の感情を守ることはとても大事なことです。しかしそれは相手の人間性を無視することをたやすくしてしまわないでしょうか。こちらから心を閉ざすということになってしまわないでしょうか。

被後見人さん達と接していていつも感じるのは、皆さん多かれ少なかれ、人との関わりに飢えているということです。

精神上的障害はコミュニケーションからの疎外を招きます。他者の言葉を理解することも、自分の気持ちを他者に伝えることも難しくなります。足腰が悪くなれば自由に出かけることもままならなくなるし、親しい人達は少しずつこの世を去ってゆきます。寂しさを紛らわせる手段は段々と減ってゆきます。

この世に生きている限り、誰だって究極には孤独状態です。しかし被後見人さん達の置かれた孤独状態は若く健康な者との孤独とは全く異なるものです。精神上的障害、特に認知症は社会参加の機会を根こそぎ奪います。どんなに理解力が落ちているように見えても、ご本人は自分の状況を正確に理解しているものです。社会の中に自分の役割がないという絶望感については、私もかつて専業主婦という名の引きこもりをやっていたので少しは理解できているつもりですが、社会復帰の可能性が全く閉ざされているという点で被後見人さん達の味わう絶望感は全く深さが違います。

後見人として関わる中で、ほんの一瞬でもこの世を生きる寂しさを紛らわせていただけたら。そんな独りよがりですまらないことを考えながら、私は今日も被後見人さんの下へと出かけてゆく。一緒に笑ったり怒ったりしながら、私もその関わりの中で随分と救われています。